

聖書：ローマ 1：18～23

説教題：真理をはばむ人間

日時：2015年4月12日

パウロは1章16～17節でこの手紙のテーマについて述べました。特に17節では「福音のうちには神の義が啓示されている」と述べました。この福音についてパウロはいよいよ解説して行きます。そのためにまず語るのが、これを必要とする人間の墮落した状態についてです。この議論が目指す当面の目標は3章9節：「ユダヤ人もギリシヤ人も、すべての人が罪の下にあると責めたのです。」10節：「義人はいない。ひとりもいない。」19節：「すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するため」こうした人間の状態への考察を経て、3章21節から「しかし、今は、律法とは別に、しかも律法と預言者によってあかしされて、神の義が示されました。」と述べられて、その祝福が語られて行くことになるのです。

さて、この神の義が与えられることなしの私たちの状態についてパウロがまず語っていることは、神は人間に天から怒りを啓示しているということです。この怒りは罪に対する神の怒りです。神は世界の歴史の最後、罪に対する怒りとさばきを最終的に表されますが、それよりも前の現時点の歴史の中でも、その怒りをすでに現わし始めていると言われています。神は一体どんなことに怒りを覚えているのでしょうか。18節：「不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して・・・」。

今日見て行きたい一つ目のことは、「人間がはばんでいる真理」とは何かについてです。19～20節から分かることは、それは神についての真理であるということです。19節：「それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。」しばしばキリスト教に反対する人の中には、こう質問する人がいます。「私たちは聖書を通して神を知ることができるから良いが、福音を聞くチャンスがなかった人はどうなるのか。その人は神を知りたくても知る術がなかったのである。それでも神を信じなかったと言って最後の日にさばかれるのか。アフリカの奥地に住むキリスト教のキの字も知らない人はどうなるのか。」と。しかしこの箇所によるなら、たとえ福音を聞く機会のなかった人でも「神を知らなかった」と弁解することはできないと言われています。なぜなら神がすべての人に明らかにご自身を示しておられるからであると。一体、そんなにも明白な神の啓示はどこになされているのでしょうか。20節：「神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。」

ここに神によって造られた世界が、作者なる神をあかししていると語られています。似たような例として芸術家の作品を考えることができます。作品にはそれを作った人の個性や哲学、またその人の技量や能力が示されています。バッハが作った曲にはバッハが刻印されています。それはモーツァルトやベートーヴェンの曲とは違います。あるいは絵画で言えば、ゴッホの絵にはゴッホらしい特徴があるでしょうし、モネの絵にはモネらしい特徴があるでしょう。同じようにこの世界は、これを造り、今なお支えておられるお方を指し示しています。ある人はこの世界を神の作品の展示館になぞらえました。確かに私たちは毎日の生活で世界を眺め、宇宙を眺めることにおいて、多くの神の作品を見えています。四方八方から神の作品に取り囲まれていて、神の作品がずらっと展示されている展示館の中を毎日歩き、生活しているようなものです。なのに私は神について何も分からなかった、何も示されなかったという言い訳は果たして通用するのでしょうか。

この聖書のメッセージを考える際、一つのことを考慮することは大切だと思います。それはこの世界は罪が入ったことによって、最初に造られた状態からすれば、その輝きは失っているということです。神が造られた最初の世界は、神から見て「見よ、それは非常に良かった」と言われる世界でしたが、被造物の冠である人間が墮落したことによって、この世界も呪いの下に置かれることになってしまいました。この世界はいばらとあざみが生じるころなり、地はそう簡単には作物を生じなくなりました。そういう意味でこの世界は神を映し出す素晴らしい鏡でしたが、その鏡が大きくゆがんでしまった。歪んだ鏡を見るとどうでしょうか。たとえばスプーンに映った自分の顔を見るとどうでしょう。たいていはグニャーと伸びた顔が奇妙に見えるものです。それと同じように、人間が墮落した後の世界は、最初に造られた状態と同じレベルで神の栄光を映し出してはいないのです。しかしその余り、今の世界にはもう神の栄光が見られないかのように考えるのも間違いです。私たち人間が墮落した後もなお神のかたちであると言われているように、この世界もなお、神のあわれみによって支えられ、輝きを放っています。詩篇 19 篇 1 節：「天は神の栄光を語り告げ、大空は御手のわざを告げ知らせる。」 また私たち人間は特別な意味で神を映し出す鏡だと言われています。墮落によって、それは大いに傷ついてはいますが、それでもなお人間を通して神はどのようなお方かが、映し出されてもいるのです。

ところがです。二つ目のポイントとして見たいのは、この神が明らかに示している真理を人間がはばんでいるということについてです。この神のメッセージに抵抗し、これを拒否し、これに対して突っぱねる態度を取る。その真理を退け、わきへ押しやり、できることなら除き去ろうとしている。なぜでしょうか。それは私たちが神を認

めたくないと思っているからです。21 節にあるように「神を神としてあがめたくない」と考えるからです。私たちのプライドが神のメッセージとぶつかり、神が示していることに従いたくないと考えて、これを自分の頭から追い出そうとするのです。ここに「神の永遠の力と神性」とありますが、その神性の一つに「神の主権性」があるでしょう。この世界の被造物には神こそ主権者であることが示されています。しかし私たちにはこれを認めたくないという気持ちが働きます。最初の人間アダムがそうでした。彼はエデンの園に置かれて、「あなたは園のどの木からでも思いのまま取って食べて良い。ただし善悪の知識の木からだけは取って食べてはならない」と命じられました。本来アダムは神から祝福だけを受けていたのですから、この命令にも神の良いお考えがあるに違いないと信頼して神に従うべきでした。しかし彼はサタンにそそのかされて、自分が神の位置に上ろうとします。神の主権を認めて従うより、自分が主権者になろうとしたのです。私たちもその性質を引き継いで誰かが私の上に主権を持っているという考えが気に入らず、相手が神でもこれをはばみ、これを無視する生き方に進もうとするのです。

また世界の被造物に示されている神性には、神の聖さもあるでしょう。私たちはこれも嫌がります。なぜなら神のきよさは私たちの罪をさらけ出すからです。この神の御前では罪責感を覚えるからです。ですから私たちはこの真理を認めるのを嫌がり、そんな神などいないのだと否定して、自分の好き勝手な歩みを貫こうとする。

またこの世界の被造物や歴史には神が「全知」であることも示されています。私たちはある意味では自分を他の人に知ってもらいたいとも思っています。無視されるのは嫌なのです。しかし逆にあまり知られることも好みません。全部は知られたくないのです。なぜかと言えば、そこには恥ずかしい部分があるからです。ところが神は私のことを全部知っていると言います。心の中のことまでもすべて。私たちはこの考えがイヤなのです。だからこんな性質を持つ神は否定して、そんな考えには支配されない生活を送りたいと考える。

また神の「不変性」の真理もそうでしょう。いつかこの神も変わると思えばまだ我慢できます。今日、主権者であっても、聖い方であっても、全知の方であっても、いつかそれが終わりになるなら、待つこともできる。ところが神は変わらない。昨日も今日も明日も永遠に主権者であり、聖なる方であり、すべてを知っておられる方。私たちはそういう考えがイヤなのです。自分にとって都合が良くないのです。そこでこの真理に抵抗し、否定して、このような神がおられるというのではない、もっと別の仕方での世界を説明し、それで自分を納得させ、安心させようとするのです。

しかしこのような神の真理をはばむ態度は、私たちに重大な結果をもたらします。

三つ目のポイントとして見たいのは、この真理の拒否が私たちにもたらす報いについてです。21 節に、神を神として崇めず、感謝もしない時、「かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました」とあります。真理を拒否し続けると、人間はどうなるかと言えば、もっと真理が分からない知性の暗い人間になってしまうのです。たとえば $1+1=2$ という真理を受け入れず、それは 3 だ、4 だ、あるいは 100 だなどと言ってはねつけてばかりいるとどうなるのでしょうか。その調子で小学校低学年で教えられる足し算、引き算、掛け算、割り算にすべて反抗して、でたらめなことを正しいと言ってはばんでいるとどうなるのでしょうか。5 年生、6 年生になって普通の人なら誰でもできる計算をいざ真面目にやろうとしても、皆と同じようにはできないという事態に直面することになるのです。同じように神の真理を拒否し続けると、私たちの心あるいは知性はどんどん暗くなり、霊的な理解力・洞察力は低下するのです。そうなってしまったからでは、もはや神の真理を理解したり、味わったりすることができなくなるのです。

もしかすると私たちは今日の御言葉を読んで、最初はここで言われている内容に納得しなかったかもしれません。この世界のどこにそんなにも明白な神のメッセージが見られるだろうか。確かに大海原に沈む夕日を見て神を感じるとか、新しい生命の誕生に接して神を感じたという話があるのは事実だが、それにしても自然における神の啓示はあまりにもあいまいではないか。神は明らかに示したと言っているが、私には正直そうは思えない。神の力はそんな程度のものなのか、と。しかしそのように考える時、私たちは問題は私の方にあるのかもしれないと考えているのでしょうか。神の示す力が弱いのではなく、物事を見る私の霊的な視力が落ちている。だから目の前にそれがあってもそれを認識できない。もし私たちが神の真理をはばむ生活をし続けて来たなら、確かにその心は暗くなっているのです。その状態で私には見えない、感じないと言っても、神が悪いのではなく、自らの側に問題があるのだと言うべきではないのでしょうか。

神の真理をはねつけていることの代償は大きいのです。頑なな心ではばんでいると、益々真理が分からなくなる状態へ自分を追いやるのです。にもかかわらず人間は誇り高ぶり、私は賢い、知者であると言って、23 節にあるように、神にこそ帰すべき栄光を、滅ぶべき人間や鳥、獣、はうものの形に似たものに帰しているのです。これについては次回、22 節から改めて見たいと思います。こうして人間は愚かになり、どんな悲惨に向かって突進しているかが 1 章残りの部分で語られます。そしてそこにおいて神はご自身の怒りをすでに示し、さばきを始めておられると語られるのです。

果たして私たちに望みはあるのでしょうか。心が暗くなり、真理を悟る力を失って

いるであろう私たちに希望はあるのでしょうか。そんな私たちにパウロは「神の福音」をこの手紙の中で語ってくれます。神は私たちに「神の義」を与え、私たちの暗い心にもう一度、ご自身の光を注いでくださるのです。Ⅱコリント 4 章 6 節：「『光が、やみの中から輝き出よ。』と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。」神の真理をはばんで来たために、物事を正しく見ることができなくなった私たちの心に、この神の光が入ることができますように。神にこそ帰すべき栄光を他のものに取り換えて、偽りのものを拝む空しい生活ではなく、まことの神を認め、知り、喜ぶ生活へ進むことができますように。すべての光の源なる神を味わい、賛美し、神とともに歩む生活へ進むことができますように。そこにそのように造られている私たち人間の幸いと最も満ち足りる生活とが備えられているのです。